

オー!ブラザーズ

2005(平成17)年7月18日鑑賞(ホクテンザ1)



監督・脚本=キム・ヨンファ/出演=イ・ジョンジェ/イ・ボムス/キム・ジュニ/イ・ムンシク/リュ・スンス/パク・ヨンギョ (エスピーオー配給/2003年韓国映画/110分)

……『ブラザーフッド』(04年)、『マイ・ブラザー』(04年)と並ぶ「韓国版兄弟モノ」の映画であるとともに、古くは『神さまこんにちは』(87年)、最近では『オアシス』(02年)、『マラソン』(05年)と並ぶ「身障者モノ」の映画だが、異色なのは、それをコメディ風に描いていること。ある必要に迫られて、一度も会ったことのない異母弟と出会った兄は、悪徳カメラマン(?)。そんな兄にしたがって養護学校からシャバへ出てきたのは、年齢は12歳ながら「早老症」のため外観は完全なオッサンの弟。さて、そんな2人がこの映画の中で、私たちに観せてくれる物語は……?

私が観た韓国版兄弟モノの3本目

私が観た韓国版兄弟モノの第1作は『ブラザーフッド』(04年)で、第2作は『マイ・ブラザー』(04年)。それに続く第3作がこの『オー!ブラザーズ』(03年)だが、前2作が涙を誘う感動モノだったのに対し、これはコメディ風!

『マラソン』は「自閉症」だが、こちらは「早老症」

昨日観た『マラソン』(05年)は、自閉症の障害を持った少年がマラソンに生き甲斐を見つけるという実在する人物の感動物語だったが、この『オー!ブラザーズ』では、養護学校に入っている12歳の異母弟オ・ボング(イ・ボムス)の病名は何と「早老症」。これを聞いた兄のオ・サンウ(イ・ジョンジェ)は「早漏症」と誤解し、「12歳でもそんな病気になるんですか?」と本気で質問するところからして、すごいコメディ……?

韓国版「身障者」映画の役者たち……

『マラソン』で自閉症の主人公を演じたチョ・スンウも熱演だったし、『オアシス』(02年)で重度脳性麻痺の女性を演じたムン・ソリもすごい熱演だった。韓国では演技の勉強や技術が発達しているためか、1度は身障者の役をやってみなければ、役者としての幅が広がらないと思っているかのように好んで身障者の役を演じている感がある。そういえば、韓国映画を代表する俳優であるアン・ソングも、『神さまこんにちは』(87年)では、慶州の瞻星台に登るため1人不自由な身体で旅立つ身障者の役を(『シネマルーム2』232頁参照)……。

「早老症」の弟を熱演するのは……？

この『オー！ブラザーズ』で、ホントは12歳の少年ながら、外見は完全なオッサンという早老症の弟を熱演するのは、今回ホクテンザで開催された「韓流シネマ・フェスティバル2005」で私が完全に顔と名前を覚えたイ・ボムス。二枚目俳優が多い韓国俳優陣の中ではちょっと異色の、丸顔で大きな顔だから、決してハンサムとは言えないが、そのためかえって個性的な役柄が数多く与えられるようだ。『アナーキスト』(00年)では血気盛んなアナーキストの役を、『シングルス』(03年)では、同級生の女性と同居するという風変わりな男性役を、そして『ジャングル・ジュース』(01年)ではソウルの売春街、清涼里で働くチンピラの役をそれぞれ見事に演じているが、この『オー！ブラザーズ』では……？ パンフレットは彼のことを「若手性格俳優」と称しているが、まさにそのとおり……。

主人公は誰？

この映画の主人公は兄のオ・サンウ。彼はカメラマンだが、あまりまっとうなカメラマンではないようだ。それは、映画の冒頭にいきなり登場する、ヘンなオバサンと若い男を彼がいきなり写真撮影するシーンを観ればわかる。つまり、不倫現場の写真を撮って、これを脅しに使うというヤクザがかった悪いカメラマン……？

こう書いていて思い出したのは、私が現在「応援副団長」を務めている佐々部

清監督の映画『カーテンコール』の冒頭シーン。これも、伊藤歩扮するカメラマンが政治家と女優とのスキャンダラスなキスシーンをスクープすることに大成功するシーンから始まる。しかし有頂天になっていたこのカメラマンは、写真撮影された女優の自殺によって、左遷されることに……。似たような出だしだが、その後のストーリー展開はもちろん全く異なるもの……。

こんなサンウのもとに届いたのは、少年だったサンウと母親を捨てて別の女のもとに走った父親が死亡したという知らせ。とっくに縁が切れていた父親の死などハナにもかけないサンウだったが……？

サンウのお友達は？

こんな悪徳カメラマン(?)のサンウだから、付き合っている人間にもロクなヤツがない……？ その第1はチョン刑事(イ・ムンシク)。詳しいことはわからないが、これもかなりの悪徳刑事のようで、なぜかサンウに対して金を払えと要求……？

その第2はパク社長(パク・ヨンギユ)。一応はまっとうな(?)会社の社長らしいが、他方で不良債権の取り立てで稼いでいるらしい。そんなパク社長は、サンウが連れてきた弟のボングに対して3つの誤解をしたうえで、これは不良債権の取り立てに使えると確信したから、以降サンウとボングの人生は大転換することに……？ その3つとは、

- ①12歳ながら早老症のボングの睨み鋭い目を見て、「脅しの能力」を直感。
- ②養護学校に4回も出入りしていることを、4回もムショに出入りしていると誤解。
- ③早老症の治療のため不可欠なインシュリン注射をしているボングの左腕を見て、ヤク常習犯特有の注射跡と誤解……。イヤはや、何とも面白い大誤解だ。

ツポにはまった兄弟の仕事！

ホントは気の弱いサンウは、パク社長から不良債権の取り立てを命令されても全然実行できず、スゴスゴと退散していたのだが、弟のボングと2人で行動することになると、ボングの効果は絶大。そりゃ目の前で大きな目を剥かれたり、目

の前で注射器をブスッと左腕に刺したりするのを見れば、それだけで不気味。そのうえ所詮やるのが12歳の男の子だから、一般社会人の基準で見るとそりゃ異様なもの……。 「無いものは無い！」とエラそうに開き直っていた債務者たち(?)も、この兄弟コンビの取り立てには、さすがにマイッタとみえて、不良債権の回収にはわかに順調に……。こうなるとパク社長もウハウハ顔……。

次の指令は……？

順風満帆の不良債権取り立て稼業だったが、サンウとボングへの次の指令は、ろうあ者となっている娘探しの仕事。これは死にかけている父親が、死ぬ前に1度別れた娘と会いたいと希望していることを受けたもの。よりによって自分を捨てた父親の像をめぐって悩んでいるサンウに対してそんな指令をもってくることにサンウが反発したのは当然。しかし、イヤイヤながらその仕事を実行したサンウは、「今さら絶対に会いたくない」と言う(?) ろうあ者の娘に対して「〇〇、△△、××」と説得……。その結果、病院のベッドで眠る父親と再会したらろうあ者の娘は……？

やっと気づいた父親の愛情と、兄弟の愛

こんな父娘再会の姿を見てサンウが思い出したのは、自分と母親を捨てて別の女のもとに走った父親の別れるときの言葉。果たしてそれは……？

そして、そんな言葉の意味がわかったのは、外見は立派なオッサンだが知能は12歳の弟ボングが語る交通事故で死ぬ直前の父親の言葉。果たしてそれは……？

コメディに徹した映画ながら、最後にはホロリとさせるシーンを用意したのは、この映画で監督デビューしたキム・ヨンファ。1971年生まれの若手監督だが、人生の機微を十分に理解した有望監督として期待したいものだ。

2005(平成17)年7月19日記